１年次生へのオムニバス授業導入の意義と課題

—教育学専攻専門科目「人間と教育」FDアンケート結果の分析—

江　川　陽　介、村　上　純　一

Ⅰ．緒言

１．専門教育の基礎としての「人間と教育」

「人間と教育」は、教育学専攻１年生の必修授業であり、学生は春期に１を、秋期に２を受講する。

「人間と教育」が導入されたのは平成20年（2008年）からである。それ以前は「教育学原論」を受講していた。この科目は教職科目でもあり、教育学専攻の学生は「教育基礎論」の代わりに「教育学原論」を受講することになっていた。つまり「教育学原論」は、「教育学の専門教育における基礎」と「教職における基礎」を、一つの科目の中で学ぶものであった。平成20年以降、上の２つの基礎をそれぞれ別の科目で学ぶようにカリキュラム変更した。教職の方は従来からの「教育基礎論」であり、教育学の方は新しく「人間と教育」を設定した。

「人間と教育」は、４年間の専門教育の基礎と位置づけられた。これに続いて２年次に「教育学研究」、３・４年次に「教育学演習」と「心理学演習」（平成23年度に廃止）を配置した。学生が４年間を通じて、教育学と心理学（当時）の研究方法や研究課題を、従来よりも系統的に習得できるようにした。

本専攻は従来より、少人数制の演習（ゼミ）を通じての専門教育を特徴としていた。平成20年度のカリキュラム改定は、この特徴をより発展させようとした。学生が専攻する分野に関して、より主体的に選択できるようになり、その結果として各ゼミの活動がより活発化していくことをめざした。まず、３・４年次の「演習」を主軸と位置づけ、２年次の「教育学研究」はプレ・ゼミとしての性格を持たせた。この科目は、春期と秋期の各１つを選択必修とし、指導教員とのより親密な接触を通して、各研究分野への興味関心を発展させたり焦点化できるように工夫した。

１年次の「人間と教育」は、２年次の「教育学研究」への接続を考慮して、オムニバス授業形式とした。14名（平成12年当時は12名）の教員が、春秋１回ずつ交代で講義を行う形式である。そのようにした背景には当時、次のような学生についての現状把握があった。

本専攻に入学してくる学生は、進路に関しては教職をめざす者が多い。したがって入学案内などで、取得できる教員免許については、当初からある程度の理解を持っている。ところが、本専攻で学ぶことができる研究領域については、入

学時にはほとんど理解していないし、あまり興味ももっていない。このような状況下で、従来のカリキュラムでは、学生が３年次に所属するゼミを決める際に戸惑っていた。研究領域よりも、教員の人柄や見かけで、学生がゼミを決めるという側面があったことは否めなかった。

これに対して、本専攻の専門教育の基礎においては、まず学生に本専攻で学ぶことができる研究領域を理解させたり、それぞれの分野が持つ方法の面白さや視点の多様性を感じ取ってもらう、ということが必要だということになった。本専攻の教員の研究分野は、多様性に富んでいるという特徴がある。それは、自然科学から社会科学や人文学に及び、別の見方をすると、教育実践、制度から思想へと及んでいる。「人間と教育」でオムニバス授業形式を取ったのは、この多様性を積極的な意義を持つものとして、入学したばかりの学生に受け止めて欲しいという願いを含んでいる。

以上、科目「人間と教育」導入の経緯とそこでの議論を述べたが、改めてこの科目の形態、広い意味での目的と、具体的な目標を整理すると、次のようになるだろう。

（１）形態

・１年生　専門科目　必修
・オムニバス授業：全専任教員による単発の講義
・春期「人間と教育１」、秋期「人間と教育２」

（２）目的

・４年間を通しての専門教育の基礎科目である。学生自らが興味関心のある分野を選び、その研究に必要な基礎的知識を獲得し、研究面で意欲的に大学生活を送るための基礎を習得する。
・２年次の「教育学研究」（プレゼミ）、３・４年次の「演習」（ゼミ）へと繋ぐ役割を果たす。

（３）目標

・教育学の研究に対する興味・関心を高める。
・本専攻で専門的に学ぶことのできる分野・領域と基礎文献を知る。
・専攻内諸分野における研究方法の基礎と多様性を理解する。
・全専任教員の顔ぶれ、個性、人柄に触れる。
・同級生間の交流を図る。

２．FD の対象としての「人間と教育」

今回、文学部で行う FD は、第１の課題として、学生教育面で、専攻レベルで行っている特徴的な取り組みについて、専攻間で交流する（「専攻じまん」）ということが挙げられる。第２に、各専攻がその取り組みを紹介するにあたって、何

らかの形での検証と合わせてそれを行う、ということがある。これは、FDの新しい取り組みとして、具体的な活動を対象として、その意義や効果の検証を行うというものである。

本専攻では、その対象として、科目「人間と教育」を選んだ。それは専攻内で、いま次のような問いが生まれているからである。

・専門教育の導入科目として、この科目は、どのような面で意義を持ち、どのような面では課題が生まれているのだろうか。
・オムニバス授業形式を続けるのが望ましいか。この形式は、全員の教員が一度は学生の前で授業を出来るメリットがある半面、統一感を与えるのが難しい面もある。

今回の調査結果を踏まえて、基礎教育の改善について、議論し、新たな提案を行いたいと考える。

Ⅱ．調査方法

1．実施期間

平成23年10月～12月にかけて、1年生は「人間と教育」の授業内、2年生は「教育学研究」の授業内、3、4年生は各所属の演習（ゼミ）内で行った。

2．アンケート方法と回収方法

アンケートは無記名回答とした。教員がそれぞれの授業内にてアンケート用紙を配布、説明した上で、学生が記入し、教員が回収した。アンケートの有効回答数は138件（1年生51名、2年生26名、3年生24名、4年生37名）であった。なお調査当時の専攻所属の学生数は、1年生61名、2年生50名、3年生46名、4年生75名、合計232名である。アンケート回収率は59.5％であった。

3．アンケート項目

アンケート項目を表1に示す。各評価項目に対して1～5の段階評価（5件法）にて回答を得た。なお項目6は2年次以上の学生に、項目7は3年次以上の学生に回答してもらった。

4．データ集計の方法

各評価項目の評価点は、次のような式により評価平均値（Pi）として算出した。

評価平均値（Pi）
＝｛(5×人数)＋(4×人数)＋(3×人数)＋(2×人数)＋(1×人数)｝÷(回答人数)

また、アンケート項目を、授業を通じた学修に関して学生を主体とした項目（学生関連項目）と、授業に対する教員の取組みや働きかけと大きく関連すると

表１．アンケート評価項目

項目	評価項目	関連分類
1	あなたの学年を教えてください	—
2	あなたの入学年度を教えてください	—
3	あなたの性別を教えてください	—
4	あなたはこの授業に積極的に参加しましたか	学生
5	あなたはこのオムニバス形式の授業（各教員が登場する授業）に満足していますか	学生
6	あなたは２年次の（教育学研究）を選択する際にこの授業が参考になりましたか	教員
7	あなたは３年次の（教育学演習）（心理学演習）を選択する際にこの授業は参考になりましたか	教員
8	教育学専攻で学ぶことのできる分野や領域について理解が深まりましたか	教員
9	研究の方法やレポートの書き方について学ぶことができましたか	教員
10	この授業をきっかけに本や論文を読みましたか	学生
11	教育学専攻に所属する専任教員について知ることができましたか	教員
12	クラスの学生同士の交流は深まりましか	学生
13	（人間と教育）についてその他の意見をご記入ください	—

考えられる項目（教員関連項目）に分類した（表１）。分類したそれぞれの関連項目ごとの評価平均値を以下のように算出した。

学生関連評価平均値＝ $(P_4 + P_5 + P_{10} + P_{12}) \div 4$
教員関連評価平均値＝ $(P_6 + P_7 + P_8 + P_9 + P_{11}) \div 5$

続いて、学生関連評価平均値と教員関連評価平均値が各評価項目とどのような関連性を持っているのかを検討した。回帰分析は、１年生とその他の学年で傾向が異なることが予想されるため、全学年の分析と、１年生のみの分析の２つを行った。統計には重回帰分析を用い、有意水準を５％未満とした。

さらに、学生関連評価平均値と教員関連評価平均値の散布図を作成し、（各関連評価平均値－２S.D.（標準偏差））を基準とし、４つの象限に分類し、学生の評価がどの象限に属しているのかを検討した。各象限は以下のように関連付けられる。

第Ⅰ象限：学生関連評価平均値、教員関連評価平均値共に基準以上で適正
第Ⅱ象限：学生関連評価平均値は基準以上であるが、教員関連評価平均値が基準以下。問題あり。
第Ⅲ象限：学生関連評価平均値、教員関連評価平均値共に基準以下。大いに問題あり。
第Ⅳ象限：教員関連評価平均値は基準以上であるが、学生関連評価平均値が基準

以下。問題あり。

5．評価項目に関する分析と考察の視点

1）学生側の評価項目分析

学生が授業にどう取り組んでいるか、その取り組み姿勢を分析する。また学生がこの授業を通してなにを身につけたのかを分析する。

2）教員側の評価項目分析

教員の授業内容や、教員の学生に対する働きかけが学生に与えた影響を分析する。

3）評価項目の関連性の分析

学生自身の評価と教員の働きかけが影響する評価との関連性を分析する。授業を通してどのような働きかけをすれば学生の学習効果が向上するのかを検討する。また授業を低く評価した学生の特徴を分析する。

4）「人間と教育」の授業の方向性の検討

得られた分析結果から、「人間と教育」の現状を明らかにし、特色ある基礎教育の構築にむけて何が必要なのかを考察する。

Ⅲ．結果

1．各評価項目の度数分布

各評価項目の度数分布表を表２に示す。また、各項目の５段階評価におけるそれぞれの段階の割合を図１に示す。

授業に積極的に参加した学生の割合（評価１および２の合計）は57.2％であった。また、授業形式に満足しているかという問いに大して満足しているとする学

表２．各評価項目の度数

	良い ←			→ 悪い		
評価項目	1	2	3	4	5	合計
あなたはこの授業に積極的に参加しましたか	18	61	39	16	4	138
あなたはこのオムニバス形式の授業（各教員が登場する授業）に満足していますか	10	69	50	5	4	138
あなたは２年次の（教育学研究）を選択する際にこの授業が参考になりましたか	25	38	14	8	2	87
あなたは３年次の（教育学演習）（心理学演習）を選択する際にこの授業は参考になりましたか	18	21	14	5	3	61
教育学専攻で学ぶことのできる分野や領域について理解が深まりましたか	26	73	29	6	4	138
研究の方法やレポートの書き方について学ぶことができましたか	14	43	49	14	18	138
この授業をきっかけに本や論文を読みましたか	3	16	62	25	32	138
教育学専攻に所属する専任教員について知ることができましたか	38	90	8	2	0	138
クラスの学生同士の交流は深まりましたか	36	55	33	10	4	138

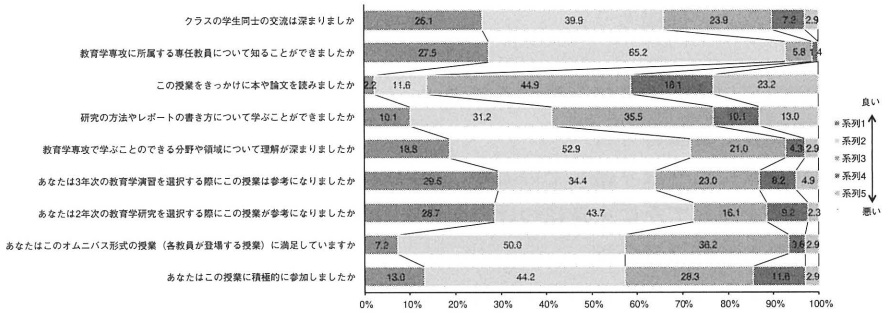

図１．各評価項目の５段階評価の割合

生の割合は57.2％であった。研究方法やレポートの書き方について学ぶことができたと答えた学生は41.3％、授業をきっかけに本や論文を読んだと答えた学生は13.8％しかいなかった。授業を通して学生同士の交流が深まったと答えた学生は66％であった。

教育学専攻に所属する教員を知ることができたかという問いには92.7％の学生が知ることができたと答えていた。教育学専攻で学ぶことのできる分野や領域について理解が深まったとする学生は71.7％であった。また、２年次の教育学研究を選択する際にこの授業が参考になったという学生は72.4％、３年次の演習を選択する際にこの授業が参考になったと答えた学生は63.9％にのぼった。

２．回帰分析

学生関連評価平均値と教員関連評価平均値および各評価項目の関連性を示す回帰分析の結果を表３に示す。授業に対する積極性と授業に関する満足度に関しては学生関連評価平均値と有意な相関があり、教員関連評価平均値との関連性はなかった。

２年次および３年次のプレゼミ、演習の選択のきっかけには教員関連評価平均値と中程度の有意な相関があった。教育学分野の理解やレポートの作成方法に関しては教員関連評価平均値との関連性が高かった。またレポートの作成方法に関しては１年生において教員関連評価平均値と高い正の相関を示していた。

２年生以上の学生は本授業において教育学専攻の教員を理解することに学生関連評価平均値も教員関連評価平均値も関連していなかったが、１年生では教員関連評価平均値が有意な相関を示した。

なお、クラスの学生同士の交流に関しては学生関連評価平均値も教員関連評価平均値のどちらも関連性はなかった。

３．教員関連評価平均値と学生関連評価平均値の関連性

教員関連評価平均値と学生関連評価平均値の関連性を示す散布図を図２に示す。学生関連評価平均値と教員関連評価平均値には弱い相関があった。しかし、

表３．回帰分析の結果

評価項目		全学年を対象とした回帰分析結果 学生ポイント	全学年を対象とした回帰分析結果 教員ポイント	１年生を対象とした回帰分析結果 学生ポイント	１年生を対象とした回帰分析結果 教員ポイント
授業に対する積極性	相関係数	0.74	0.11	0.76	−0.13
	Ｐ値	＊	0.203	＊	0.37
授業に対する満足度	相関係数	0.54	0.29	0.61	0.44
	Ｐ値	＊	＊	＊	p＜0.05
クラス交流の深まり	相関係数	−0.01	0.30	−0.38	0.39
	Ｐ値	＊	＊	＊	＊
教育学研究選択のきっかけ	相関係数	−0.29	0.68		
	Ｐ値	＊	＊		
演習選択のきっかけ	相関係数	−0.17	0.68		
	Ｐ値	0.183	＊		
教育学分野の理解	相関係数	0.30	0.52	0.08	0.56
	Ｐ値	＊	＊	＊	＊
レポートの書き方	相関係数	0.10	0.63	−0.23	0.80
	Ｐ値	0.23	＊	0.12	＊
教員の理解	相関係数	0.02	0.35	0.08	0.56
	Ｐ値	0.79	＊	0.56	＊

＊：p＜0.05

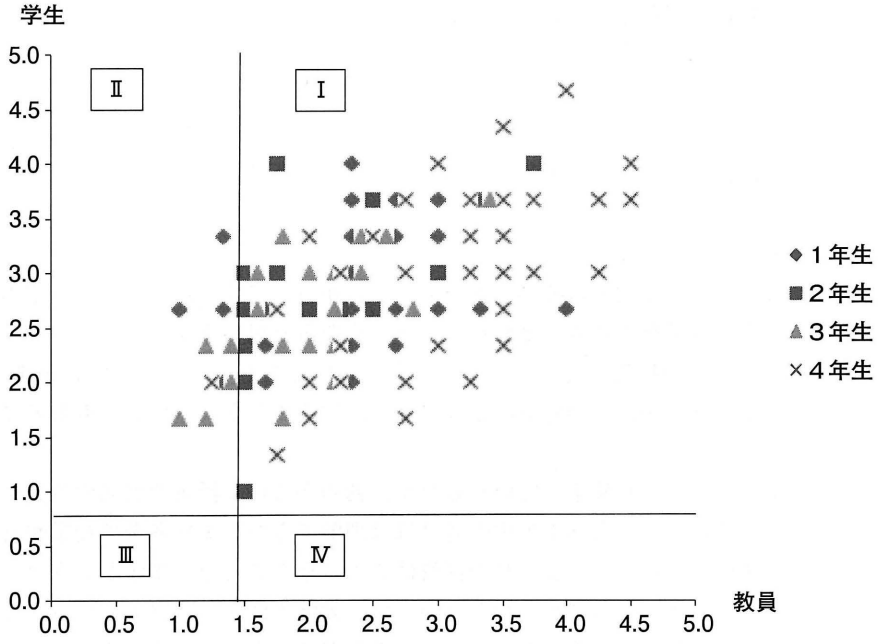

図２．教員関連評価平均値と学生関連評価平均値の関連性

１年生のみの検討では各関連評価項目に関連性はなかった。一方で２年生以上の検討では各関連評価平均値に正の相関があった。

各関連評価平均値から標準偏差の２倍の値を減じた値を基準として象限分けしたところ、ほとんどの学生が第Ⅰ象限に属していた。また第Ⅲ、第Ⅳ象限に属する学生はいないものの、第Ⅱ象限には数名が属していた。この象限は学生関連評価平均値は基準を満たしているが、教員関連評価平均値が基準を満たしていない。この第Ⅱ象限および基準値周辺には15名もの学生がいた。

４．自由記述項目

項目13の自由記述欄に記載されたものを、３・４年生について（１・２年生は省略）以下に示す。

■３年生

・大学１年生なので授業内容などがまだわかっていない人が多いと思うので、いろいろな先生が専門分野の授業を詳しく教えてくれることは、とても参考になると思う。３年次からのゼミも、「人間と教育」の授業を受けていれば、自分がこの分野を専門的に学びたいと思える授業が見つかり、ゼミ決めしても有効になると思う。

・平成22年次以降の学生は、４年次後期に「教職実践演習」があるので、教育学専攻の全教員が講義を行うことは、意味があることだと思う。個人的には、論文の書き方など大学生として必要な最低限度のことは、教えてほしかった。

■４年生

・「人間と教育」で行う授業形態は、実際の「教育学研究」は異なっていたように感じる。

・ひとつの授業以外役に立った。

・教育学のいろいろな先生の授業を体験できて良かったです。ただ、習得予定の科目の先生の授業をより多くとれればよりよくなると思います。

・いろいろな先生の授業を受けることができるのはとてもいいと思っています。この先生はこうとか、あの先生はどうだとか、知ることができてとても参考になります。

・毎週先生が入れ替わり授業していましたが、初めから密な授業を展開する先生が多く基礎知識のない大学１年生の時はほぼ理解できないまま各週の授業が終わってしまいました。もう少し私の授業はこのようなことをしますというオリエンテーションがあればよかったと思います。大学生活を１年終えてやっと２年生くらいのころから、やっといろいろな先生がこのような授業をするかというのがわかり始めました。そのため、１年生の時の「人間と教育」はあまり役に立たないと思います。まず、授業を受けてみてはじめて各先生の授業スタイルがわかると思います。

・授業が単発的で90分の中でその授業を深めることは難しかったですが、「人間と教育１、２」を受けるにあたって専任教員を幅広く知ることができたのは良かったと思います。
・研究の方法、レポートの書き方などを学ぶことは出来なかったと思います。また、小学校などの現場にも積極的に参加できるようにしてほしかった。
・教員の名前や顔は知ることはできたけど一回一回入れ替わりで行っている、詳しくその授業の得意分野、領域を知ることはできなかった。
・学生が興味のある教授を選べるようなシステムにした方がこの講義の目的に合致すると思う。各教授が講義できる場所を確保して、そこに学生が参加するスタイルにする。(参加は固定化しないで移動は自由に)
・多くの教授が授業をしてくれることは、いろいろな分野や先生を知ることが出来る良いチャンスだと思いましたが、逆に先生によってその分野に対しての興味が無くなることなどもありました。いろいろな授業を受けられるのは有り難いのですが評価の基準と統一性が無い限り学生が混乱してしまうのではないかと思います。

Ⅳ．考察

１．学生側の評価項目分析

授業に積極的に参加した学生の割合と、授業形式に満足している学生は半数を超えていたが、一方で半数近くの学生が授業に積極的に参加しておらず、また現在のオムニバス形式の授業形式に満足していなかった。同様に、授業を通して研究方法やレポート作成方法を学ぶことができたと答える学生も少なく、授業をきっかけに本や論文を読んだ学生は極めて少ないという現状が浮かび上がった。オムニバス形式の授業形態を採用する以上、教員と教員の授業間に統一性を持たせることは難しいが、専攻教員の間で「人間と教育」の授業方針や意義というものが十分に理解されていない可能性があり、単発の授業の連続の中で何を学生に伝えるのを教員自身が明確に認識する必要があると考えられる。

２．教員側の評価項目の分析

教育学専攻に所属する教員を知ることができたと答えた学生は９割以上にのぼっており、「人間と教育」導入の経緯で議論された目標である、専攻教員の理解に関してオムニバス形式の授業が大きな影響を与えているといえる。また、２年次で履修するプレゼミ、３年次以降で履修する各演習を選択する際にこの授業が参考になったとする学生は多く、本専攻で学ぶことができる研究領域のおおまかな把握と、多様性に触れさせるという目標もクリアしていると思われる。すなわち「人間と教育」導入以前と比較して、学生が教育学専攻の全体像を把握できるようになっており、また学生自身の興味のある学問分野を知るきっかけとなっているといえる。ただし、本授業に関して否定的な見解を示している学生はすべ

ての評価項目が低く、また低学年では否定的な見解を示す学生が多かった。授業形態だけではなく、学生が送る大学生活全般が、アンケート結果に影響している可能性がある。また、現在授業を受けている学生（１年生）の評価と、専攻の様々な授業を受けた上で、授業全体を客観的にみることがきる学生が１年目に受講した授業を振り返ってつけた評価との間に差があることは、専攻全体の授業内容や形態、方針も検討する余地があるということを示唆しているといえる。

３．評価項目の関連性の分析

評価項目単体において評価値の高かった２年次および３年次のプレゼミ、演習の選択のきっかけ、また教育学分野の理解やレポートの作成方法に関しては教員関連評価平均値との関連性が高く、教員の授業中の働きかけが、その後の学生の進路や学習環境の構築に大きく影響を与えていることが示された。また１年生は「人間と教育」の授業内でレポートの作成方法を学んでいる実態が浮かび上がった。現在専攻内ではレポート作成法を扱う授業はない。この授業において、分野ごとに異なるレポートや論文の作成方法に多く触れることは、その後の学生の文書作成能力に影響する可能性が高い。

２年生以上の学生は本授業において教育学専攻の教員を理解することに学生関連評価平均値も教員関連評価平均値も関連していなかったが、１年生では教員関連評価平均値が有意な相関を示した。専攻教員を理解することにこの授業が貢献していることは項目単体の評価でも明らかになっているが、特に１年生にとってこの授業において教員から得た情報、教員の印象が専攻の全体像を把握するきっかけとなっていることが予想される。

なお、クラスの学生同士の交流に関しては学生関連評価平均値も教員関連評価平均値のどちらも関連性はなかった。項目単体の評価ではこの授業がきっかけとしてクラス交流が深まったと答える学生が多かったが、それは授業中の教員の働きかけや学生の授業に対する積極性の影響ではないといえる。専攻全体で集まる授業は４年間を通してこの授業だけであり、学生同士のコミュニケーション状態や日常生活が交流を深めるきっかけとなっていると考えている。

教員関連評価平均値と学生関連評価平均値には弱い相関があった。１年生のみの検討では相関がなく、２年生以上の検討では相関があったことから、この授業を受講している１年生と教員との間には距離があり、教員に対する信頼や大学に対する好意（愛校心のようなもの？）は小さいと考えられる。しかし、オムニバス形式の授業形態である以上、専攻や大学、教員を知るきっかけにはなったとしても、それを深く理解し学生自身の糧としていくことは難しい。ただし、高学年および全体として評価すると両項目に相関があることから、本授業をきっかけとして自分の興味のある関連分野の授業を履修することにより、これは解決できるものと考えている。学生に対して学習の「きっかけ」を作るということに関しては、本授業形態が一番適しており、この点を教員は理解した上で、学生に対して

アプローチをする、学生に対してこの授業の意義を説明する努力が求められる。

本授業に対する学生の評価を散布図に示し、象限分けしたところ、いずれの評価も高い学生と、基準内ではあるもののいずれの評価も低い学生および、第Ⅱ象限に属する学生関連評価平均値は高いものの教員関連評価平均値が基準以下の学生の３つのグループがあることがわかった。学年ごとに評価をすると、特に４年生で「人間と教育」を高く評価している学生が多く、第２象限周辺には１年生から３年生まで学年に関係なく分布していた。各評価平均値ともに高い評価の学生の特徴は、４年生および学力の高い学生だと予想される。一方で各評価平均値ともに低い評価の学生の特徴は、学力が低い学生、１年生の入学当時から進路（教科）が決まっており他の教科に興味がない学生の可能性が高い。また、第Ⅱ象限周辺に属する学生は学年に関わらず特に学力が低く、授業内容を理解できない学生の可能性が高い。従って、担当教員はこれら受講している学生の背景と可能性に多様な形があることを認識し、「人間と教育」が専攻の基礎教育としての位置づけである点に考慮し、授業を工夫する必要があると考えられる。また、領域の多様性を伝えるために授業が専門的な内容にも触れることになるが、学生が何も知らないことを前提に話をする必要があると考えている。

Ⅴ．まとめ

「人間と教育」の授業の方向性の検討

本専攻の専門教育の基礎教育科目として設置されている「人間と教育」に関して、専攻に所属する全学生を対象にアンケート調査を行った。本科目は４年間を通じて学生が教育学専攻で学べる多岐に渡る研究分野の、研究方法や研究課題を系統的に習得できるよう設置された科目である。

調査により、受講する学生の背景（目指す進路や基礎学力、大学における学習経験など）によってこの科目の捉え方が異なることが明らかになった。すなわち、受講する学生の学力や専門的な興味によっていくつかの集団に分類される可能性がある。しかし、１年生にとっては専攻教員および教育学専攻の教員や全体像を把握するきっかけとなっており、２年次で履修するプレゼミ、３年次以降で履修する各演習を選択する際に参考とされていることも事実である。

今回の調査で明らかになった「人間と教育」の現状から、特色ある基礎教育の構築にむけて以下のことを考慮する必要があると考えた。

１．教育学専攻の学生に必要な講義要件

文学部の授業は、学習施設の制限もあり、対面集合（講義）の形態をとる。しかし授業形式は学問領域によって、講義、実習、演習、体験、トレーニング／ドリル形式と多岐に渡る。また、授業手法には伝統的な一方向講義、双方向講義だけでなく、協調学習、グループ学習、PBL（課題解決型学習：Project-Based Learning）などがある。これも同様に学問領域によって、また学習段階によっ

て適切な手法がある。この授業形式、形態を体験できることもまた、この授業の面白さのひとつである。「人間と教育」の対象は、教育学専攻の１年生である。すなわち、ほとんどの学生が将来教育に携わりたいという志を持ってはいるが、大学で学ぶ教育学という学問に関しては「何も知らない」状態である。「人間と教育」の設置経緯を考えると、幅広い学問領域それぞれの面白さを伝えるためには、オムニバス形式の授業形態にて、教員一人一人の顔をみせながら学生の知的好奇心を刺激する方法（授業形態、方式）を、学問領域ごとにとることが望ましいと考えている。授業形式が領域によって異なることもまた教育学の「真実」である。しかし、13名（24年度からは14名）の教員が毎回入れ替わり、授業を行うため、授業内容が広く浅くなることは避けられない。アンケートの自由記述の欄でもオムニバス形式の授業に対する否定的な意見もあった。これに対しては、「人間と教育」の授業の最初の講義にて、本授業の設置の経緯や意義を学生に伝えることが重要である。

２．学生の期待

本授業において、教員は学生が「何も知らない」ことを前提に授業を展開する必要がある。学生が本授業の意義や目的を明確に理解できるよう、工夫することが求められる。これに関しては授業間の関連性を持たせることや、シラバスを詳しく作成するなど、専攻の教員間でも様々な意見がある。しかし、各講義を１回にて完結させる現在の手法をベースにすることに関しては相違がない。

教育学専攻では、人間形成に関する洞察を総合的に深め、それをもとに社会に貢献できる人材の育成を教育・研究上の目的としている。「人間と教育」はその導入部分にあたる基礎教育であり、学生が４年間を通じて学問を系統的に習得できるよう設置されたものである。従って２年次、３年次の演習形態の授業に向けて必要な教育内容を提供する必要がある。本調査で得られた結果を専攻に所属する教員全員の共通認識とし、専攻の教育環境にさらなる進化を求めていきたい。